

## 学位論文の要約

論文題目：清末における湖北省日本留学生の総合研究（要約）

新潟大学大学院現代社会文化研究科 共生文化研究専攻

氏名：王鼎（WANG Ding）

---

### I 論文の構成

#### 緒論

- 第一節 研究対象と背景
- 第二節 先行研究とその問題点
- 第三節 課題設定と論文の構成

#### 第一章 清末における日本留学史の概要

##### 序説

- 第一節 清朝公使館内の東文学堂
- 第二節 中国における初期の日本語教育
- 第三節 日本留学の嚆矢とされる公使館学生
- 第四節 留日学生に対する教育政策
- 第五節 留日学生に対する管理への模索
- 第六節 速成教育の是正

##### 小括

#### 第二章 湖北留日学生の初期活動について

##### 序説

- 第一節 清末における中国雑誌の概況
- 第二節 雑誌『湖北学生界』の創刊
- 第三節 雑誌の内容
- 第四節 『湖北学生界』から『漢声』への改名
- 第五節 湖北同郷会について

##### 小括

#### 第三章 湖北軍事系留日学生の活躍と帰国後の進路

##### 序説

- 第一節 湖北武備学生の派遣について
- 第二節 振武学校と陸軍士官学校について

第三節 湖北留日学生の帰国後の動向について

第四節 救国思想からナショナリズムの誕生

小括

#### 第四章 湖北留日学生の留学経験とその影響

序説

第一節 調査経緯

第二節 麻城三兄弟の事例Ⅰ

第三節 陸軍士官学校で学んだ湖北留学生の事例Ⅱ

第四節 東斌学堂で学んだ湖北留学生の事例Ⅲ

小括

終章

資料編

附録

## II 論文の要旨

本論文の企図は、まず総体的な視点から分析をおこない、そして湖北省を一つの事例として取り上げて、留学生の日本での諸活動および中国での動向をまとめ、さらに湖北留日学生の特質を解明しようとする点にある。

### 緒論：問題設定

これまでの先行研究の成果と問題点を踏まえたうえで、本論文では次の3点を課題として設定する。

第一に、日中両国の史料を照合しながら、清末における中国人の日本留学の流れと全体像を通観し、関連政策の特徴と効果を明らかにする。この課題は主に第一章で検討する。

第二に、湖北省から日本に渡った留學生が一体何を学んだのか、また、彼らの活動がどのように展開していったのか、という点を考察する。さらに、留学先で繋がった人的ネットワーク「湖北同郷会」の成立経緯及び、当該組織の仕組み・機能役割について明らかにする。この課題は主に第二章で検討することになる。

第三に、湖北留日学生は帰国後、中国での複雑な状況にどのように対応したのか、留学経験を通じてどのような思想上の変化があったのか、という点について分析する。成城学校・陸軍士官学校で学んだ軍事系留学生の動向を手がかりとして、湖北留日学生たちが地域社会の近代化にどのように貢献したのか、また、どのように地域社会を変容させたのか、という点を明らかにしたい。この課題は主に第三章と第四章で扱う。

## 第一章：清末における日本留学史の概要

本章では、先行研究を踏まえつつ、日中両国の留学生派遣・受入政策と制度の変遷を論じた。清朝政府は、アヘン戦争以降、軍事・海事技術者・通訳人材の確保・養成に迫られることとなり、「洋務運動」という近代化政策を推進し、欧米への留学生派遣を開始した。これらの派遣計画は中途半端であったが、中には中華民国初代国務総理の唐紹儀（1862～1938）、「中国鉄道の父」と呼ばれる詹天佑（1861～1919）、『天演論』の訳者と知られている嚴復（1854～1921）、「北洋三傑」の段祺瑞（1865～1936）なども含まれ、一定の成果を挙げたと言える。しかし、派遣事業はあくまで陸海軍や造船、通訳の人材養成という目的で、体制改革には消極的であったため、意義や影響力は一部の範囲にとどまった。日清戦争における日本の勝利により、清国から日本への留学事業が活発となってきた。1896（明治29）年に、13名の公使館学生を選出し、外務大臣兼文部大臣の西園寺公望を通して嘉納治五郎に留学生の教育を依頼した。その中には湖北省最初の留日学生とされる戢翼翬が含まれており、嘉納塾で3年間学んだのち、東京専門学校に入学したことを明らかにした。

一方、湖広総督（湖北省・湖南省を統治する長官）の張之洞が『勸学篇』を著し、西洋に留学よりも日本に留学する方が「同文・路近・費省・時短」になるとして強く推奨した。その後、留日学生数は年々増加し、とくに光緒新政（1901年）の後、官費留学生のほか自費留学生も急増することとなった。その結果、速成教育が主流となる留学ブームを引き起こした。しかし、日本政府は清朝政府などの要請に応じて、留学生を管理する所謂「中国人留学生取締規則」（1905年）を制定した。これに反発した留学生たちはストライキ運動を展開した。この時期、留学生が相次いで帰国し、学生数が激減した。

総じて言えば、清末時期におけるアメリカ・ヨーロッパへの留学生派遣は、各種制度の試行錯誤の繰り返しであった。そして、日清戦争・義和団事件の後、清朝は戊戌政変で実行できなかった改革を復活せざるを得なかった。本格的な改革にともない、近代国家建設のため、軍事系人材をはじめ、法律・政治・教育に通じた人材が大量に求められるようになり、近くて安い日本への留学が次第に主流となった。しかし、日本側はそのニーズに充分対応しきれず、教育機関・寄宿舍・制度といった面で、体制を整えることができなかった。その結果、種々様々な衝突も少なくはなかった。とくに人材を短期間に養成する「速成教育」が批判の矢面に立たされた。ただ速成教育を単純に「失敗」と評価するわけにはいかない。先入観を持たずに再考しなければならない問題である。

## 第二章：湖北留日学生の初期活動について

本章では、湖北同郷会の会員により創刊された『湖北学生界』、『漢声』および『旧学』を主な資料として取り上げ、湖北留日学生の初期活動について、その詳細を明らかにした。日本留学派遣の初期段階では、留学生たちは主として日華学堂・成城学校・亦楽書院（後の宏文学院）および陸軍士官学校などに分散して在籍していた。当時、まだ留学生数は少

なく、留学生間の交流と団結力を欠いていた。義和団事件をきっかけとして、留学生界は自発的に「清国留学生会館」を創立し、その結果として留学生全体の交流が盛んになった。留学生の出身地域は、湖北省、湖南省、江蘇省、浙江省、広東省に集中していたため、日本への留学生が増加するにしたがって、学生の出身地域・派遣地域ごとに個々の「同郷会」が形成され、大団体から枝分かれしていった。

本論文は、そのなかで「湖北同郷会」に焦点をあて、当会の「雑誌部」によって発行された雑誌の特色、販売経路、運営方式、掲載内容を詳細に分析した。その分析から以下の4点が明らかになった。第一は、留学生が日本で創刊した雑誌の多くは日本在住華僑の力を借りて事業が進められていたことである。第二は、販売経路について、当初は漢口・上海を中心としていたが、後期になると、活動の重点が次第に湖北省より上海に偏っていく傾向が明らかになった。また、発行所・代理店の移転が頻繁で、不安定な状態が続いていたこともうかがえた。第三は、運営経費については、主に湖北留日学生たちの共同出資や中国在住の官紳からの寄付、雑誌の売上金、広告料金により調達していたが、拒露運動で寄付者が減少し、雑誌購読代金の回収も滞り、台所事情は決して芳ばしくはなかったことが明らかになった。第四は、「湖北同郷会」が近代国家の構築・国民意識の覚醒、奴隷根性への批判、女学教育の振興、西欧から日本にもたらされた新知識の中国への導入に尽力し、多大な貢献があったことが確認された。

湖北同郷会の会員により発刊された各雑誌の変遷を見ると、留学生の思想が「郷党観念」から「狭義の民族観念」へと変化しつつ、結果として『漢声』という民族色の強い雑誌へ繋がっていったことがわかる。さらに、当該雑誌は一般的に反帝国主義・反満革命の宣伝手段の一つとして捉えられてきたが、単なる革命雑誌ではなく、医学・物理・化学などより幅広いジャンルに渡る内容を備え、一般人向けの科学読み物の性質も併せ持っていたことも本論文で明らかにした。他方、雑誌自体は1903（明治36）年1月から9月までのわずか8ヶ月で廃刊となった。しかし、その後も「湖北同郷会」の活動自体は継続していた。雑誌の発行以外にも、西洋と日本の教材・書籍の翻訳、来日同郷人の接待などさまざまな活動に積極的に取り組んでいたことが分かった。

### 第三章：湖北軍事系留日学生の活躍と帰国後の進路

本章では、「成城学校」、「振武学校」そして「陸軍士官学校」を手がかりとして、湖北軍事系留学生たちの派遣背景と経緯、在籍状況、帰国後の進路を明らかにした。日清戦争の敗北とともに、「洋務運動」を推進した李鴻章の影響力が低下する一方で、張之洞をはじめとする地方総督の勢力が台頭した。一方、日本政府や陸軍参謀本部は厳しい外交状況に陥った清朝に対して留学生派遣の働きかけをおこなった。その結果、張之洞は日本人の軍事顧問を招聘し、武備学生を日本へ派遣するに至り、いち早く湖北の軍事改革に着手した。これは、内陸にある湖北省から勢力を拡大したい日本側と、早急に湖北省の軍事力を高めたい張之洞、双方の利害が一致したためだと考えられる。

第3章では、軍事系留日学生の育成ルートについても明らかにした。まず「成城学校」・「振武学堂」で15ヶ月から18ヶ月間の軍事を学ぶための予備教育を受け、歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重の担当部門を選択して、士官候補生として各聯隊または大隊に配属され、軍隊生活を体験する。その後、正式に陸軍士官学校に入り一年間の軍事教育を受ける。終了後は、再び元の配属先に戻り「見習士官」として半年程度部隊での勤務をおこなう。すべての科目に合格すれば、士官資格が授けられる。日本人の課程とはほぼ変わらないが、留学生の就業年数は日本人の約半分に短縮されており、一種の速成教育であったと言える。

帰国後の進路については、新軍総理練兵処、陸軍部、軍諮処（後に軍諮府）に任用されたほか、ほとんどが湖北新軍、地方の軍事教育機関に配属されていたことが判明した。早期に派遣された湖北留学生は、「陸軍士官学校卒業の貴重な人材」として、中央の首脳陣に目をかけられた。湖北から経費を醸出して育成した軍事人材は、本来であれば湖北地方に貢献すべきであると期待されていた人材だが、中央が強制的に数多くの湖北留日学生を起用し「練兵処」に配属させたのである。破格の処遇で地方人材を登用し、地方総督の力を削減しようという意図が当時の中央政府にあったことは明白である。一方、学生の立場から考えると、湖北省より中央のほうが権力に近く、出世にも有利で、魅力的に映ったであろう。さらに、一部の革命思想をもった軍事留学生在が革命派を支持するようになり、要所、要所に辛亥革命の基礎が構築されたという点も看過できない。

#### 第四章：湖北留日学生の留学経験とその影響

湖北省で実施した現地調査の結果に基づいて、湖北留日学生の学習・生活体験およびその後の生涯にもたらした留学体験の影響や意味について三つの事例を取り上げ、考察を試みた。まず事例Ⅰは黄州府麻城の三兄弟である。余祖言（1873～1938）は官費留学生として1904年に「宏文学院」に入った。同氏の族弟の余仲勉（1884～1910）は同年秋、自費で「宏文学院」へ入った。そして、余祖言の義弟の李子祥（1881～1944）は湖北鉄道留学生として1905年に東京の私立路鉞学堂（後に「湖北鐵路学堂」に改称）に入学した。事例Ⅱは陸軍士官学校を卒業した藍天蔚（1877～1921）である。藍は湖北省黄陂生まれで、「成城学校」を経て陸軍士官学校の第二期生として卒業し、士官三傑とも呼ばれている。事例Ⅲは1905年に自費で来日した向巖（1872～1959）は、1908年「東斌学堂」を卒業している。明らかにしたことは以下の三点にある。

第一に、湖北同郷会の下に、黄州同郷会の存在が確認できた。つまり、従来、省単位同郷会は注目されてきたが、実際はその下にある府・県の同郷会もある。また、府同郷会は必ずしも省同郷会の下部組織ではなく、先に成立された基幹組織となる可能性もあると指摘したい。第二は、留日学生は来日後すぐに翻訳活動に着手しはじめる傾向があった。翻訳された分野には、兵学、鉄道、警察、教育などに多岐にわたるが、翻訳の質が疑問となる。また、留日学生の翻訳活動が、単に近代国家建設のために自発的な奉仕活動であったばかりではなく、あくまで自分たち自身の経済状況を改善したいという面もあった。第

三に、日本留学により得られた知識・技術を全面的に活用し、地域社会の軍事・教育・実業などの近代化に貢献した事例が多く見られるが、さほど役に立っていない事例もある。ただし、留学経験者にとって少なくとも異国で形成された同郷人と学友の人的ネットワークが重要であったことは間違いない。

### 終章：結語と今後の課題

以下、本学位論文が明らかにした点を三つの部分に分けて総括している。第一に、湖北省留日学生が留学中一体どのような行動を展開したのか、またそれらの諸活動が地域社会にどのような貢献をしたのか、という点を解明した。第二には、「成城学校」・「振武学校」、そして「陸軍士官学校」で学んだ軍事系留学生を手がかりとして、帰国後、彼たちは中央政府と地方政府の人材争奪にどのように対応したのか、という点を解明した。第三に、湖北省で実施した清末留日学生の子孫に対する聞き取り調査をもとに、五人の事例を取り上げ、彼らの留学経験と意義、またその影響という点を解明した。

なお、湖北留日学生名簿（1896年～1905年）といった資料を本稿第Ⅱ部の「資料編」として末尾に附した。

最後に、各章の基礎となる学術論文の初出は以下の通りである。

第一章「清末における日本留学史の概要」は、新潟大学大学院現代社会文化研究科編『日本語・日本文化研究』（2017年11月）に掲載された「清国留学生と留日政策についての一考察」（171頁至193頁）および、中外語言文化比較研究叢書『日本語文化論叢』（武漢大学出版社、2019年11月）、所収論文「清末における初期中国人日本留学生についての再考」（203頁至223頁）をもとにして大幅に改訂したものである。

第二章「湖北留日学生の初期活動について」は、新潟大学大学院現代社会文化研究科編『現代社会文化研究』第64号（2017年3月）に掲載された「雑誌『湖北学生界（漢声）』から見た清国日本留学生の諸活動」（143頁至160頁）、および東洋文庫紀要『東洋学報』102巻（2020年）に投稿中の学術論文「清末中国人日本留学生の創刊雑誌よりみた湖北同郷会について」をもとにして大幅に加筆修正を加えたものである。

第三章「湖北軍事系留日学生の活躍と帰国後の進路」は、新潟大学環日本海研究室編『環日本海研究年報』第25号（2020年3月）に掲載された「清末における湖北省の軍事留学生—成城学校・陸軍士官学校をてがかりとして」（84頁至114頁）をもとにして加筆修正を加えたものである。

第四章「湖北留日学生の留学経験とその影響」は、アジア教育史学会『アジア教育史研究』第30号に投稿する予定の内容をもとにして加筆修正したものである。

### III 史料・参考文献

#### (一) 史料文献 (年代順)

##### ① 講道館資料館所蔵文書、1896～1909年。

『宏文学院記録(一)』(契約書類、教育課程、施設用具、東亜書院、試験答案等)

『宏文学院記録(二)』(清国公使館との往復書類、沿革資料、学生関係、経費関係)

『宏文学院記録(三)』(清国への応募契約、信濃宏文学院、教科書編輯、別函・書簡集)

『宏文学院記録(四)』(「国土」中に見える亦楽書院・宏文学院に関する記事、中国人書簡、新聞記事他)

##### ② 史料集・事典

『日華学堂日誌』明治31年至明治33年、未定稿。

宝閣善教日記『燈焰録』明治31年、『行雲録』明治32年、未定稿。

『中国年鑑』東亜同文会調査編纂部、1920年。

羅家倫編『中華民国史料叢編』中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会、1968年。

沈雲龍・郭榮生『日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿』文海出版社、1974年。

劉真主編『留学教育—中国留学教育史料』国立編訳館、1980年。

『成城学校百年』校史編集委員会編、1985年。

廖一中・羅真容『袁世凱奏議』天津古籍出版社、1987年。

東亜文化研究所編『東亜同文会史』霞山会、1988年。

梁啓超『飲冰室合集』(全12冊)中華書局、1989年。

『辛亥革命人物像伝』武漢大学出版社、1993年。

苑書義・孫華峰・李秉新編『張之洞全集』河北出版社、1998年。

陳学恂・田正平編『中国近代教育史史料匯編・留学教育』上海教育出版社、1991年。

璩鑫圭・唐良炎編『中国近代教育史史料匯編・学制演變』上海教育出版社、1991年。

大浜徹也・小沢郁郎編『帝国陸海軍事典』同成社、1995年。

周綿主編『中国留学生大辞典』南京大学出版社、1999年。

宇都宮太郎關係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策：陸軍大将宇都宮太郎日記(第一卷)』岩波書店、2007年。

顧廷龍・戴逸編『李鴻章全集』安徽教育出版社、2007年。

藍薇薇『藍天蔚年譜長編』上海交通大学出版社、2016年。

## (二) アジア歴史資料センター (JACAR)

外務省外交史料館所蔵

『在本邦清国留学生関係雑纂・陸海軍之部』請求番号：B-3-10-5-3-1

『在本邦清国留学生関係雑纂・陸海軍外之部』請求番号：B-3-10-5-3-2

『在本邦清国留学生関係雑纂・海軍学生之部』請求番号：B-3-10-5-3-3

『在本邦清国留学生関係雑件・学生監督並視察員之部』請求番号：B-3-10-5-3-4

『在本邦清国留学生関係雑纂・留学生学費之部』請求番号：B-3-10-5-3-5

『在本邦清国留学生関係雑纂 雑ノ部』第1巻～第4巻、請求番号：B-3-10-5-3-6

明治・大正時期の留日学生に関して：請求番号 B-3-10-5 (通商/宗教、教育及び学芸/外国人留学)

## (三) 報告書

① 清国駐日公使館・遊学日本学生監督処発行、1907年至1911年。

『官報』(第1期～第50期)復刻版、国家図書館出版社、2009年。

② 清国留学生会館発行、1902年至1903年。

『清国留学生会館第一次報告(自壬寅年一月起八月止)』1902年10月。

『清国留学生会館第二次報告』1903年3月。

『清国留学生会館第三次報告(自癸卯三月至九月)』1903年11月。

『清国留学生会館第四次報告(自癸卯九月起甲辰三月止)』1904年5月。

『清国留学生会館第五次報告』1904年12月。

## (四) 留学生雑誌 (年代順)

『訳書彙編』訳書彙編社、1900年(創刊年、以下略)。

『遊学訳編』湖南同郷会編、1902年。

『湖北学生界』(第一期～第五期)湖北同郷会・雑誌部、1903年。

『漢声』第六期、第七八合冊、湖北同郷会・漢声雑誌社、1903年。

『江蘇』江蘇同郷会、1903年。

『浙江潮』浙江同郷会、1903年。

『東方雑誌』商務印書館、1904年。

## (五) 書籍

① 日本語文献 (五十音順)

阿部洋『日中教育文化交流と摩擦—戦前日本の在華教育事業』第一書房、1983年。

阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990年。

汪婉『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院、1998年。

王宝平『清代中日学術交流の研究』汲古叢書、2005年。



- 大里浩秋・李廷江編『辛亥革命とアジア』御茶の水書房、2013年。
- 大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房、2002年。
- 大里浩秋・孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房、2009年。
- 大里浩秋・孫安石編『近現代中国人留学生の諸相—「管理」と「交流」を中心に』御茶の水書房、2015年。
- 神谷正男編『宗方小太郎文書—近代中国秘録』原書房、1975年。
- 見城悌治『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範』日本経済評論社、2018年。
- 巖安生『日本留学精神史』岩波書店、1991年。
- 小島淑男『留日学生の辛亥革命』青木書店、1987年。
- 酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触—相互誤解の日中教育文化交流』ひつじ書房、2010年。
- 實藤恵秀『中国人日本留学史稿』日華学会、1939年。
- 實藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版、初版1960・増補版1970年。
- 實藤恵秀『中国人日本留学生史談』第一書房、1981年。
- 周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000年。
- 周一川『近代中国人日本留学の社会史—昭和前期を中心に』東信堂、2020年。
- 孫安石・大里浩秋編『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店、2019年。
- 高田幸男『戦前期アジア留学生と明治大学』東方書店、2019年。
- 李成市・劉傑編『留学生の早稲田』早稲田大学出版部、2015年。
- 劉建雲『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂』学術出版会、2005年。

② 中国語文献（アルファベット順）

- 淳於森洽・潘麗霞『重慶留学史研究（1898～1966）』中国社会科学出版社、2014年。
- 馮天瑜・何晓明『張之洞評伝』南京大学出版社、2009年。
- 馮天瑜・張篤勤『辛亥首義史』湖北人民出版社、2011年。
- 馮自由『革命逸史』商務印書館、1947年。
- 黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所、1975年。
- 李喜所『近代中国的留学生』人民出版社、1987年。
- 李喜所編『中国留学通史（晚清卷・民国卷・新中国卷）』広東教育出版社、2010年。
- 林子勳『中国留学教育史』華岡出版、1976年。
- 呂順長『清末浙江与日本』上海古籍出版社、2001年。
- 呂順長『清末中日教育文化交流之研究』商務印書館、2012年。
- 木宮泰彦著・胡錫年訳『日中文化交流史』商務印書館、1980年。
- 舒新成『近代中国留学史』中華書局、1927年。
- 蘇雲峯『張之洞与湖北教育改革』中央研究院近代史研究所專刊(35)、1976年。

- 蘇雲峯『中国現代化的区域研究 湖北省 1860～1916』中央研究院近代史研究所專刊(41)、1987年。
- 田正平『留学生与中国教育近代化』広東教育出版社、1996年。
- 田正平『伝統教育的現代転型』浙江科学技術出版社、2013年。
- 王奇生『中国留学生的歴史軌跡（1872～1949）』湖北教育出版社、1992年。
- 王曉秋『近代中日文化交流史』中華書局、1992年初版、2000年修訂版。
- 巖昌洪・許小青『癸卯年万歳：1903年の革命思潮与革命運動』華中師範大学出版社、2001年。
- 楊天石・王学莊『拒俄運動 1901～1905』中国社会科学出版社、1979年。
- 章開沅・余子侠『中国人留学生史』社会科学文献出版社、2013年。
- 張難先『湖北革命知之録』商務印書館、1946年初版、2011年再版。
- 張玉法『清季の革命団体』中央研究院近代史研究所專刊(32)、1982年。

#### (六) 学術論文

日本語（五十音順）

- 王鼎 「雑誌『湖北学生界（漢声）』から見た清国日本留学生の諸活動」『現代社会文化研究』第64号、2017年。
- 王鼎 「清末における初期中国人日本留学生についての再考」陳慧玲・王閏梅編『日本語言文化論叢』中外語言文化比較研究叢書、武漢大学出版社、2019年11月。
- 王鼎 「清末における湖北章の軍事留学生：成城学校・陸軍士官学校を手がかりとして」『環日本海研究年報』第25号、2020年。
- 黄福慶 「清末における留日学生派遣政策の成立とその展開」『史学雑誌』第81卷（7号）、1972年。
- 胡穎 「清末の中国人日本留学生に関する研究—主に留学経費の視点から」『言語と文化論集』特別号、2017年。
- 小島淑男 「日本大学中国人留学生の帰国後の活動（一）～（三）」『日本大学史紀要』第10号、第11号、第12号、2007～2010年
- 蔭山雅博 「宏文学院における中国人留学生教育—清末期留日教育の一端」『日本教育史学会紀要』第23集、1980年。
- 蔭山雅博 「宏文学院における中国人留学生教育の展開—清末期留日教育の一端（二）」齋藤秋男編『教育のなかの民族—日本と中国』秋石書店、1988年。
- 柴田幹夫 「日華学堂日記：1898年～1900年」新潟大学国際センター『国際センター紀要』第9号、2013年。
- 孫瑛鞠 「梁啓超の近代国民思想の形成—任侠から新民へ」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第42号、2016年。
- 中村哲夫 「拒俄運動隊・軍国民教育会」『東洋學報』第54期、1971年。

永井算巳 「所謂清国留学生取締規則事件の性格：清末留日学生の一動向」『信州大学紀要』第2号、1952年。

二見剛史・佐藤尚子 「中国人日本留学史関係統計」『国立教育研究所紀要』第94集、1978年。

船寄俊雄・邵艶 「清末末期における留日師範生の教育実態に関する研究：宏文学院と東京高等師範学校を中心に」『神戸大学発達科学部研究紀要』10巻2号、2003年。

宮城由美子 「成城学校と中国人留学生についての一考察」『佛教大学大学院紀要』第35号、2007年。

李慶国 「呉禄貞と日本(1)：呉禄貞に関する伝記史料をめぐって」『追手門学院大学国際教養学部紀要』第10号、2016年。

李廷江 「日本軍事顧問と張之洞 1898～1907」『アジア研究所紀要』29号、2002年。

呂順長 「清末「五校特約」留学と浙江省の対応」『中国研究月報』第600号、1998年。

#### 中国語（アルファベット順）

黄国華 「清末第一個以省区命名的留日学生刊物『湖北学生界』」『歴史教学』1980年。

李喜所 「清末留日学生人数小考」、『文史哲（第3期）』山東大学歴史系、1982年。

尚小明 「留日学生与清末軍事改革」『戊戌維新与清末新政』北京大学出版社、1998年。

徐志民 「九・一八事変前日本对中国留日軍事学生政策研究」中国社会科学院近代史研究所編、2011年。

徐志民 「留日学生与近代中国研究述評」『史学理論研究』2019年第3期。

楊典錕 「日本陸軍士官学校的中国留学生—以第一至十一期畢業生為中心的分析」『台大歴史学報』第94期、2012年。